

歐洲兒童の健康狀態に就いて

米國赤十字醫員 イー・エム・ジヨセフソン

戰爭が其の國の次の時代に如何に深い影響を及ぼすものであるか、又、其の國の子供等が幸福か否かは一國の未來を如何に左右するものであるか、といふことが、現代ほど痛切に感じられる時はないのであります。歐洲大戰の當初、數多の緊急な事件が衆目を惹いてゐた時に於てさへ、諸國は、次の時代の國民を保護するための諸機關に對して、時と勢力を、資本とを惜しまなかつたといふ事に依つても、子供等は如何に大切なものであるか、が證明されて居ります。大戰も終局に近づき、諸國が次第に疲勞を覺えて來た時に、この兒童問題は、人々の豫想以外に切迫して來ました。諸國は、子供等が餓え瘦せ衰へて、發育不完全になつてゐるのを見て、戰爭の悲慘を一層深く増し、全く憂慮に閉ざされてしまひました。平和克復と共に、歐洲諸國の或るものは、速かに恢復して、未來の市民の幸福を計る諸機關を發達させる事に、多大な興味を有して、其の方面へ

向つて行きました。一方、他の國に於ては、平和克復になつて、却て、子供等の健康が害されて行く事を、見出したところもありました。

今、ヨーロッパ諸國に於ては兒童の健康上に、大戰の不幸な影響が、繪のやうに鮮明に表れて居ります。この論文に於て私は、ヨーロッパの重なる國々の兒童の健康上に及ぼした大戰の影響を概説致しまして、且つ又、兒童の生命を保護するため、健康な兒童をつくるために、用ひられてゐる兒童保護の諸設備を簡単に概説致して見たいと思ひます。

フランスに於ける兒童の狀態

フランスが大戰に依りて新たに占領した土地に於きましては、子供等、殊に六歳以上の子供等は、栄養不良で甚だしく苦しんで居ります。一九二〇年五月に、リル地方の兒童を調査して見ますと、十二歳の兒童は八七%、十三歳の兒童は九一%、十四歳の兒童は九三%、平均體重以下の者がありました。十

二歳の児童は八四%、十三歳及び十四歳の児童は八六%、平均身長以下の者がありました。一方に於きましては、七歳及び九歳の間の児童は、前者の児童よりも、より善い状態にあるのであります。此等健康上の障害は、児童の精神發達にも影響して居りまして、メンタルテストを試みました結果十歳から十三歳に至る迄の児童は平均よりも凡そ一年半の精神發達が遅れて居ることがわかりました。

佛國の新占領地がおだやかになりますや否や、此の状態を償ふために、新しい諸方面の活動が行はれました。此等の活動から得た最も著しい結果は、夏期學校の事業に於て、明らかに表れて居ります。即ち、一九二〇年の調査に依りますと、夏期學校で夏を過した數千の子供等のうち、七五%は、體重を増し、身長の如きは二釐も増して来て、其上著るしい精神發達さへ表れました。又、八〇%は、次の年一年間學校を缺席しなければならぬやうな疾病に罹らなかつたと云ひます。それから、児童保護委員の監督の許に乳兒相談所を設立しまして、誕生後の保育に注意した結果、乳兒死亡率が昨年中に著しく減少して参りました。

歐洲大戰中、一九一年には、恐るべき牛乳缺乏が起きました。パリに於きましては、人口が増加して來たにも拘はらず、供給される牛乳の量は、五〇%も減じられました。この牛乳缺乏を防ぐために種々の手段が施されました。その中には、小牛を肥すために牛乳を與へることや、クリーム・チーズを製造することや、製薬所で病人に牛乳を與へること等を禁止する命令さへあつた程です。

次のやうな材料は、興味あることゝ思ひますから、左に述べて見ませう。フランスに於ける死亡率は、こゝ數年間は比較的に低くありました。一九一一年及び一九一三年には、相當に人口が増加してゐましたが、それが、一九一四年から、大戰中にかけて、生産缺乏の結果、逆行してしまひました。一九一一年及び一九一五年には、一〇〇〇につき六・七の生産缺乏がありました。一九二〇年には一〇〇〇につき三・六の生産増加がありまして、これは、一八六五年以來の最高の報告であります。

乳兒死亡率は、フランスに於ては、過去十年間に可成りに高くありました。一九一二年には、生産一〇〇〇につき一〇四で、これが最低であります。

一九一五年大戦中には、一〇〇〇につき一四一にのぼり、これが最高がありました。死産數や私生児生産數も、生産率と平行して居ります。

オーストリアに於ける児童の状態

オーストリアほど、大戦の影響をうけて、經濟制度の破産を蒙つたところはありません。非常に貧しい者も、相當に暮してゐた者も、同様に影響を受けました。この状態は、すべての階級の児童に、年齢の多少を問はず、あらはれて居ります。児童の生長發達の上に發育不完全があらはれて居るのに加へて、母親達の著るしい榮養不良が新しく生れて來る乳兒の上に、影響を及ぼしてゐるのであります。ウキス博士が一九一六年から一九一九年に至る迄に生れた乳兒を調査した結果に依りますと、第一に、誕生したばかりの乳兒中、一五%から二〇%までは、平均體重より少くありました。第二に、一歳から四歳までの子供等の中、三三%は、平均體重より少いのであります。又、貧民階級及び中產階級の子供等のうち、九〇%は拘僂病や貧血病の著るしい徵候が多少とも表れて居りました。

拘僂病や貧血病の流行は、一部分は、脂肪分や

牛乳等の極端な不足に基いて居ります。ヴィエラに於ける牛乳供給は、目下、非常に不充分なのであります。オーストリア現在の人口の凡そ三分の一を占めてゐるヴィエナの人口一八〇〇〇〇〇に對して、

牛乳は六〇〇〇〇立ほどに過ぎず、しかも、その牛乳の大部分は、混合物がしてあるのです。夏期になりますと、牛乳は市場に出るまでに既に酸っぱくなり、乳兒の食物には適しなくなつてしまひます。前述の牛乳の量は、實際、ヴィエナ市で需用される眞の量の五分の一にも足りぬのであります。如何なる理由でかう云ふ缺乏を來たしたかと云ひますと、政府が牛乳の賣價を安く定めた結果、農夫は、市場で牛乳を賣つても利がないために、家畜に其を與へてしまふやうになりましたし、其れに加ふるに、飼草の不足は、家畜の生産に妨害を招きました。米國赤十字は、この問題に興味を持つて、ヴィエナ市と共に力して、新鮮な牛乳の供給をはかり、この慘状を救濟することをつとめて居ります。

ヴィエナに於て一九二〇年に、中央児童保護員が六歳以下の子供の調査を行つた結果に依りますと、一一〇〇〇〇の児童總數中、調査を試みた八三五〇

○の中四〇%は栄養不良であり、一〇%はしきもその榮養不良が極端に甚だしく、たゞ一〇%のみが相當に發育して居つた事を表して居ります。

牛乳缺乏半面には、こんな面白い事實もあります。一九二〇年には、ヴィエナに於ては、胃腸病から起る乳兒死亡率が著しく減少しましたのは、牛乳が缺乏してゐた爲に、母親達が自身で乳兒を育てるやうに餘儀なくさせられたからであります。

一九二〇年三月上旬に、ザルツベルグ市に於いて、三歳から十四歳迄の年齢の子供の調査に依りますと、四一六九の子供等の中、三四五五は栄養不良であります。調査は、ファン・バークエット・メソッドに従つて、子供等を分類し、調査した土地は、オーストリアの大都市や工業中心地に於て行ひました。

一方に於ては、レントのやうな小都市は、子供の健康狀態が可成りに良好である事が表れました。

ヴィエナに於ける生命統計表は、この児童に關係して、實に興味あるものでありますから、左に一言致して見ませう。

生産率——一九一四年から一九一八年に至るまで、ヴィエナの生産が三六四四二から一九二五七、即ち五

二・八%減じられました。公生兒の生産(四二%)の減少は、私生兒の生産(五八%)と大して差がありません。又同年間に、死産の數は、三七七一から二五一七、即ち三三%に減じられました。一九一九年平和克復と共に、生産率は再び増加し始めました。

乳兒死亡率——一九一四年には、乳兒死亡率が、五四七四であります。一九一八年には二九四一に減少して居ります。之を、乳兒死亡率の平均と比較して見ますと、大戰前の平均より少し高くなつてゐるだけであります。一二・二七%から一五・二八%の間を往來してゐるのみであります。死亡率の減少は、生産率の減少に歸するのであります。公生兒の死亡率は、大戰前よりも一般に低く、一二・二七と一三・〇八との間を往復して居ります。大分、牛乳缺乏の結果、母親自身が乳兒を養育する事が、前述のやうな状態を表すやうになつたのであります。この乳兒死亡率の減少は、私生兒の死亡率が一九一四年には一六・〇二%から一九一九年の二三・〇七%に増加した事と、面白い對照になつて居ります。

児童死亡率——一九一四年から一九一九年に至るまで、一歳から五歳迄の児童の死亡率は二〇一八であ

りますから、戰前一九一二二年前から一九一四年までの一九八四に比較すれば、少しく増加して居ります。生産率の減少したこと考へに入れるごと、この數字は三〇%の増加を表して居ります。五歳から十五歳迄の子供の死亡率は、大戰中には一般に高く、一九一五年から一九一九年までは、一四二六となり、凡そ三四%の増加がありました。

一般死亡率——前述の年間に於きましたは、一般死亡率も肺結核からの死亡と同様に増加して居ります。自然増加——一九一五年から一九一九年に至る迄の間に大戰前に相當に増加してゐた人口が、生産缺乏によつて、一〇〇〇〇〇即ち凡そ五%減少して居ります。然しながら、一九一九年來、年々にこの状態が恢復し、人口も自然に増加して來て居ります。

チエック・スロバキアに於る兒童の状態

チエック・スロバキアは主として工業國でありますから其の國の農業は人口に適する程に充分な食物を供給してくれません。近年、工業不振、物價騰貴等に依つて、生活は非常に困難を來たして居ります。肺結核から起る死亡率は高く、子供等の大部分は、其の病氣に悩まされて居ります。又、眼疾がい

ちじるしいので、近頃、眼病と榮養不良との關係に就いての研究も、頻りに始められて居ります。

次に述べる生命統計表に表はれた實例は、興味あることゝ思ひます。モラヴィアに於ける生産率は、一八八一年には一〇〇〇につき三六・八の平均から、一九一八年には一〇〇〇につき一二の平均に迄、減少して來ました。一九一九年には、生産率は再び一九・八までに増加しました。一九一一年から一九一九年に至るまで、乳兒死亡率は、生産一〇〇〇につき、ボヘミアに於ては一八〇、モラヴィアに於ては一八六、西シレシアに於ては一九二となつて居ります。チエック・スロバキアの平均は、一〇〇〇の生産につき一八六の死亡率がありまして、即ち一年に五〇〇〇〇〇以上の乳兒死亡があるわけであります。同年間に、モラヴィアとボヘミアは一〇〇〇〇〇につき三二八の肺結核死亡を見ました、之は他の九文明國よりも率がはるかに高いのであります。之にともなふて、一般死亡率も比較的に高くあります。前述の諸地方の人口は、相當に増加してゐて、即ち、一八八一年から一九一五年の間には、一〇〇〇につき八・九%一九一五年から一九一八年までには、一〇〇

〇につき一一・三%の生産率にのぼつて居ります。一九一九年には、ボヘミアに於て、一〇〇〇〇につき一の増加を見、一〇〇〇につき四・七%の増加がありました。

ポーランドに於ける児童の状態。

大戦の後半に於いてのポーランドの児童の悲惨な状態は、全ヨーロッパ中で見出された最も不幸な戦禍の模範とも云ふべきものであります。ポーランドは大戦の初に於ては進軍の蹄にかかり、大戦の終には退軍の蹄にかかり、二度も蹂躪されてゐるのであります。一九一七年から一九一八年に於ける間、六歳迄の児童の健康状態に就いての調査がサデース。

コッペ博士に依つてなされて居ます。次に其の調査

の概略を述べて見ませう。第一、栄養良好の児童は、満一歳の児童に於ては六〇%ありましたのが四〇%に減じました。虛弱児童は、一五%から三〇%に増加しました。第二、満一歳の児童に於ては、平均体重以下の者が、二三%ありましたのが、満五歳の児童に於ては三五%に増加して居ります。最少體重の児童は、五〇%から六〇%に増加して居ります。第三、饑餓から起つた水腫が、満一年の児童には、一

%、満二年の児童には一三%、満三年の児童には一〇%、満四年の児童には八%満五年の児童には七%と云ふ割合で表れて居ります。第四、栄養不良から起つて、子供の發達が害せられ、歩き始めの遲れたものも多數あります。四歳から五歳迄の子供のうちに、四%は未だ足が立たぬものがありました。又、是等の子供に加ふるに、虛弱な爲や、栄養不良から起つた病氣の爲に、發育が逆行して、歩く能力を失ふた児童が、四歳から五歳迄の間に、二七%もありました。五歳の子供の一は歩く事が出来ないものがありました。第五、五歳の児童の二六%は肺結核の徵候を示して居りました。

ポーランドは主として農業國でありますから、平和克復後、穀物の收穫が豊富になり、從つて食物の供給が充分になつて参りました。次に述べますのは、一九二一年の四月、五月、六月にわたつて、數箇所の孤兒院の児童の健康状態を調査した結果であります。體重、身長、健康状態等を調査して、子供等を、栄養良好、栄養稍々可、栄養不良と分類して見ますと、男の子は女の子よりも例によつて栄養がよく、コッペ博士の調査に比べますと、少しは良好になつ

て居ります。

次に興味ある生命統計表を一言して見ませう。

生産率——ポーランドに於ける生産率は、一八九一年から一九一八年間に於て、一〇〇〇につき四〇から一四・六までに減少しました。然しながら、一九一九年には、一〇〇〇につき二六・七、一九二〇年には二九・七まで増加をして來ました。

乳兒死亡率——ポーランドに於ける乳兒死亡率は、一九〇四年から一九一六年に至る迄は、一般に高く、一般死亡率の二五%も占めて居りました。或る地方

の如きは、率が著しく高く、例へば、パロツク地方に於ては、一〇〇〇につき三七四にものぼつて居ります。勿論この期間に於ては、一般死亡率も高かつたのであります。

自然増加——死亡率よりも生産率が超過してゐるために入口が増加して行く割合は、一八九一年には、一〇〇〇につき一七でありましたが、一九一四年には、六に減じました。一九一七年には、一〇〇〇につき二四・二までになりましたが、一九一九年には三・七、一九二〇年には九・四となつて居ります。

乳兒及び兒童の死亡率と家族人數との關係——從來

度々問題とされてゐました、乳兒及び兒童の死亡率が、家族の人數の増加につれて、増すといふ事の著るしい例が、ポーランドのワルソーコレズと云ふ二都市にあらはれて居ります。是等の都市に於ては、子供の死亡率は、二人の子供を有してゐる家族に於ては、一七・三%、三人以上の子供を有してゐる家族に於ては、五六・二%にのぼつて居ります。これを見ても兒童の死亡率と家族の人數とが關係あることがわかります。

結論

前に述べました諸國に於きましては、昨年以來、兒童保護の成績が大戦中又は平和克復後間もない時よりも、ずつと良好になつて來ました。又、この論文で述べてなかつた他のヨーロッパ諸國に於ても、同様に、保護事業が恢復されてまゐりました。戰争の悲惨な影響も、日月の経るに従つて當時の状態に復し、又大戦の災を餘り蒙らなかつた國々の寛大な援助に依つて、次第に前述の國々も恢復に向つて来て居ります。今や、兒童の健康に就いての研究や一般兒童問題は世界的な、又、切迫したる問題となりました、私は未來の研究に多くを期待してやまないであります。(“The Child” 三月號より)